

平成23年度

病害虫発生予察特殊報(第1号)

平成23年11月17日
神奈川県農業技術センター所長

病害虫名：キュウリ退緑黄化病

病原ウイルス：*Cucurbit chlorotic yellows virus* (CCYV)

作物名：キュウリ

1 発生経過

- 平成23年9月下旬に、湘南地域で栽培されている抑制キュウリにおいて、葉が黄化、退緑する症状や、小型の黄斑がみられる株が複数のハウスで発生した。
- 同年10月に農業技術センター職員が現地調査を行ったところ、ウイルスによる感染が疑われたため、検定のためのサンプルを採取した。
- 当センター農業環境研究部において、RT-PCR法による検定および、その増幅DNAの塩基配列を解析したところ、ウリ類退緑黄化ウイルス *Cucurbit chlorotic yellows virus* (CCYV) が同定され、本ウイルスによるキュウリ退緑黄化病であることが確認された。
- 本病は、平成20年2月以降現在までに、沖縄県を除く九州全県と、高知県、愛媛県、広島県、埼玉県、栃木県、群馬県、茨城県および千葉県で発生が確認されている。

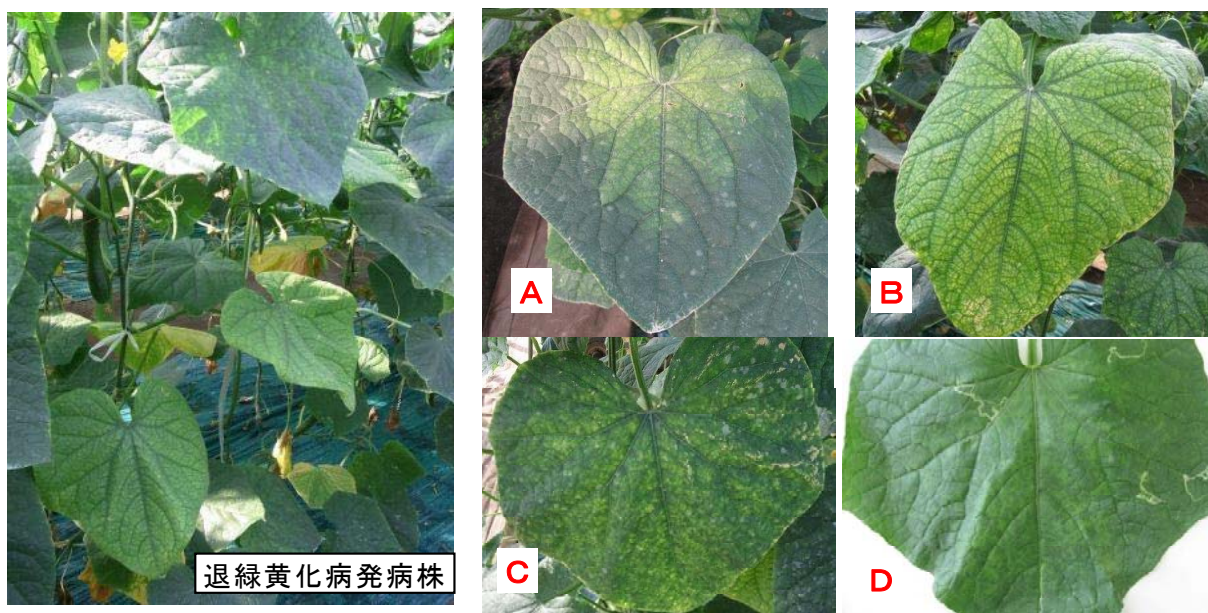
2 病原ウイルスの性質および伝染

- 伝搬方法：CCYVはクリノウイルス属に属し、タバココナジラミ（バイオタイプQ及びB）により媒介される。経卵伝染、汁液伝染、種子伝染および土壌伝染はしないと考えられている。媒介は半永続的で、媒介可能期間は10日前後と推定されている。また、獲得吸汁時間は約1日、接種吸汁時間は約6時間である。
- 感染植物：自然感染が確認された作物は、キュウリ、メロンおよびスイカである。接種試験では、その他のウリ科作物、キク科のレタス、アカザ科のテンサイ、ヒルガオ科のアサガオ、ナス科のダチュラなど広範囲の植物で感染が確認されている。

3 病徴および被害

病徴は、不鮮明な小型の黄斑から不整形の大型黄斑に進展する黄斑型病斑と、初期病斑として退緑小斑点が生じ、小斑点が増加・拡大・融合して斑点状あるいは葉脈沿いに緑色が残る黄化葉に進展する退緑型病斑がある。両病斑は同一株に発生し、黄斑型は保毒したタバココナジラミが吸汁した葉に生じる。退緑型は、保毒虫の吸汁加害以降、新たに展開した上位葉あるいは側枝の葉に出現し、上位方向に進展する。症状が進展すると、しばしば下側に葉が巻くことがある。成長点付近の葉には症状は現れず、成熟した葉にのみ症状が現れる。類似した病徴を示すキュウリ黄化病とは、病徴で識別することは困難である。

発病株は葉が黄化することで草勢が低下する。キュウリでは発病1ヶ月後から減収の被害が認められ、発病時期が早い程減収率は高くなり、最大で30%に達するという報告がある。



A：黄斑型病斑、B：進展した退緑型病斑（黄化し、下側に巻く）
C：退緑型病斑（小斑点）、D：退緑型病斑（不鮮明なモザイク症状）

4 防除対策

- (1) 育苗は独立した育苗施設を使用し、施設開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張するか、育苗場所に防虫ネットをトンネル被覆し、タバココナジラミの侵入を防止する。
- (2) 育苗期と定植時に粒剤（表参照）を施用し、ウイルスの感染を防止する。
- (3) ハウスに侵入してきたタバココナジラミは、黄色粘着シートなどによる捕殺や薬剤散布により防除する。なお、本県では、薬剤抵抗性の発達したバイオタイプQの発生が多いため、これらに効果の高い薬剤を選定する（表参照）。
- (4) タバココナジラミは雑草にも寄生するため、ハウス内外の除草を徹底する。
- (5) 栽培終了時にはハウスを密閉処理し、タバココナジラミを死滅させ、野外への分散を防止する。処理前には、キュウリを抜根または地際部を切断し、短期間で株を乾燥させる。

表 キュウリに登録のある主な薬剤（タバココナジラミバイオタイプQに効果あり）

使用方法	使用時期	薬剤名
土壌施用	育苗期又は定植時	アルバリン又はスタークル粒剤 a) ベストガード粒剤 a)
	育苗期後半又は定植時	ダントツ粒剤 a)
	定植時	アクタラ粒剤5
散布	定植後	コルト顆粒水和剤 サンマイトフロアブル アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤 ベストガード水溶剤 サンクリスタル乳剤 ハチハチ乳剤 b) コロマイト乳剤 b)

a) 育苗期と定植時で合計1回以内 b) 卵・幼虫に効果（成虫への効果は低い）

神奈川県農業技術センター 病害虫防除部
〒259-1204 平塚市上吉沢 1617
TEL 0463-58-0333 FAX 0463-59-7411
テレフオンサービス 0463-58-6612
<http://www.agri-kanagawa.jp/nosoken/boujo.asp>